

2023年7月29日

筆記 岡部昌平

第334回山口西田読書会（2023年6月24日）の Protokol

【テキスト】

旧全集の第四巻、西田幾多郎「場所」五 第2段落、274頁の9行目「右の如く特殊と一般との包摂的關係から出立し」から同275頁の11行目「矛盾的对立の対象に於いて初めて働くものが考へられるのである」まで

【キーワード】

一般と特殊が合一し自己同一となる（275ページ、1行目）

【問】

一般と特殊の合一が特殊の矛盾的对立とその統一を含むことから、その無の場所は特殊を知覚している範囲での無の場所に限定されるのではないか？（一般と特殊との間に間隙のない数理のような場合は別として）

一般と特殊の合一は無限に接近して極限に達することであると述べてある（275ページ冒頭）。感覚的には特殊を包摂していた一般が無限の接近のどこかで逆転し、特殊のなかにあった一般が表にでてくるようにイメージできる（極限に達して逆転するというより、逆転したところが極限であるという気がする）。無限の特殊が無限に一般に接近する（あるいはその逆がある）としても、具体的（体験的）には目のまえにある特殊の範囲でそれは起こるように思えるが、そのような理解でよいか。